

☆非実力派系強運まぐれ当り作家。

三谷郁夫

持駒 角 角
九

								9
								8
								7
					銀	我	我	6
					我	我	我	5
								4
								3
								2
								1
						桂		
					銀			
龍								

(詰パラ 平成11年12月号)

6七角、34桂左、22桂成、1三五、6八角、同龍、9三龍迄7手詰。
☆本作は専門棋士の方でも苦戦した方がいらしたようで、作者大喜び。
なんと日本一難しい7手詰と言われたこともありませう。作者として気を良くしたことはないまでもなく、日本一難しいと謳って名刺に刷ろうかと思ひ



ます。真偽のほどは日本一美味いライメンの看板と同レベル。どうぞ笑って許していただきたいと思ひます。

指し将棋は弱くても、ひよっこり難問を創作できるのも詰将棋のもつ不思議な魅力のひとつだと思います。

①昭和30年。4人の子持ち(笑)。

②さいたま市。④なし。⑤近代将棋昭和48年2月号⑥発表作は20題くらい?

塚田賞2回、半期賞、短コン優勝、将棋世界年間佳作賞、パラ表紙1回。

⑨好きな作家||塩見一族、小林敏樹。

⑩詰将棋に対して一言||戻りたいけど今となつては敷居が高いナ。

◇詰将棋作家名鑑⑧

昭和39年、通巻100号を迎える「詰パラ」は、ここで4回目的「百人一局集」を計画する。

昭和39年5月号に誌上掲載となったが、このときも参加者が半数に及ばない42人と、散々たるものであった。

これまで「詰将棋作家名鑑」といえば、将棋雑誌における専売企画といえたが、一般誌としては珍しい連載が昭和47年にあった。

ビジネス雑誌『週刊ダイヤモンド』の「私の詰将棋」である。昭和47年1月1日号の岡田敏氏に始まり48人が登場している。ビジネス雑誌というだけあって、通常なら(会社員)で済まされてしまうところで、会社名・職名がしっかり記録されているのが面白い。